

[特別支援教育]

自己理解を深め、自らの生き方を考えることを目指した実践

—ある難聴児の指導における教師のかかわり方に着目して—

呉竹 七恵*

1 はじめに

(1) 孤独な難聴児を支える

「耳が悪くなる原因は何ですか」「どうしたら聞こえるようになりますか」「耳が悪い人って他にもいるの?」初回の通級で子どもからよく聞かれる質問である。難聴児は、健聴者が大多数の世界の中で孤独に生きていることを感じる。

難聴通級指導教室では、補聴器や人工内耳を装用している両側重度難聴、中等度難聴の児童生徒から、補聴器を装用しない両側軽度難聴や一側性難聴、機能性難聴の児童生徒まで、様々な状態の聞こえにくさを抱える児童生徒が通ってきている。難聴児のニーズは、視覚支援を中心とした言葉の学習、聴覚を活用させる聞き取りの学習、補聴器やロジャーなどの補聴支援システムの管理や活用法の学習、人とのかかわり方やコミュニケーションについての学習など様々であるが、これらは通常の学級の中では取り組みにくい内容であり、聴覚障害教育の専門性が必要な内容も多々ある。そのような学習を行う一方で、「聞こえにくい自分」としてのアイデンティティを形成していくというニーズも大きいと考える。健聴者ばかりの日常生活の中で、聞こえにくさを隠して「みんなと同じように」必死に過ごしている難聴児が多くいる。しかし、気軽に話すことができない「聞こえにくさ」について、難聴通級指導教室で自然に話すことで、「自分」と向き合い、「聞こえにくさ」と向き合い、自己像を築く場になっているように感じる。難聴通級指導教室担当者（以下、「担当者」とする）として、学習を進めるだけでなく、子どもの話を聴き、困っていることの解決策をともに考えることで、「話せてスッキリした」「聞こえにくくても大丈夫だと思えるようになった」と元気づけられる場にしたと考えてきた。

(2) 教師のかかわり方の問い直し

難聴通級指導教室を利用している多くの児童生徒は聴力の改善が見込めないが、筆者が担当したA児は、中耳奇形の疑いがあり、手術により聴力が改善する可能性があった。A児は日頃から聞こえにくさによる困り感が明確にあったため、聴力が良くなることを期待して手術を希望すると、母親も筆者も思い込んでいた。しかし、耳鼻科で「高学年になったら手術を考えてもいいね」と言われた時、A児は涙ぐみ「受けない」とは言わなかった。「聞こえるようになることが良い」と大人が勝手に思い込んでいたことに気付かされた。担当者として「聞こえにくい時の対応スキル」や「より良い方法」を伝えることは簡単だ。だが、「ただ子どもが生きやすいようにアドバイスすることが教師の役割なのか」「それは子どもの気持ちに寄り添っているのか」「大人が先読みした未来ばかりを見て、勝手に話を進めてしまっていることがあったのではないかと自己のかかわり方を省みた。混乱しているA児の気持ちに寄り添い、A児がどう生きていきたいかを自分で選択できるように支援することが、担当者としてできることではないかと考えた。また、手術によって聴力が改善するということは、単に「聞こえるようになって良かった」というものではなく、「聞こえにくい自分」から「片耳が聞こえる自分」にアイデンティティを形成しなおすことが必要となる。難聴者や聾者としてのアイデンティティ形成過程については複数の研究で明らかにされているが、聴力が改善することは稀で、この場合のアイデンティティ形成過程についての研究は未だない。そこで、A児が新たな自己像を肯定的につくっていく姿を目指して実践を行った。

2 研究の目的

本研究では、A児が自己理解を深め、自らの生き方を考えることを目指した実践を行う。難聴通級指導教室での発話記録から、この取組によるA児の変容を捉えるとともに、難聴児に寄り添う教師の在り方を追求することを目的とする。

*上越市立大町小学校

3 研究の対象

(1) 対象児童について

B小学校の通常の学級に在籍する6年生の女児である。平成27年7月から通級による指導を開始し、現在は1か月に1回から2回の頻度で、1時間目に通級指導教室での学習を行っている。筆者は平成30年度からA児の通級担当となり、現在まで約2年半かかわってきた。思いどおりにいかないことがあると学校を休むなど、気持ちの切り替えが苦手な面がある。怒られると思ったり、大人に気を遣ったりして自分の気持ちをなかなか伝えることができず、家でも在籍校でも静かに泣くことがあった。

(2) 学習形態と内容

C小学校の防音整備がされている難聴通級指導教室にて、マンツーマンで自立活動の学習を行っている。個別の指導計画をもとに、A児のその時々様子に応じた内容（補聴器の管理方法、語彙を増やす学習、聞こえにくい時の対応方法の学習等）に適宜取り組み、指導時間は1回約45分である。指導の前後には、保護者からA児の最近の様子について話を聴いたり、難聴に関する保護者の不安を聴いたり、今後の方針について相談したりする時間を10分ほどとっている。

(3) A児の聴力の状態

筆者との通級初回時の平均聴力は、右50dB、左60dB（図1に示す）である。A児は低出生体重児であり、出生時の検査では難聴の可能性が指摘されたが、言葉は順調に増えていた。4歳で両側中等度伝音性難聴と診断され、補聴器の装用を開始した。「なふだ」を「らくだ」に聞き違えたり、長音や「ん」を聞き落として言葉を誤って覚えたりしていることがあった。難聴の原因に中耳奇形の疑いがあり、アブミ骨手術で聴力改善の可能性があった。この手術は術後安静保持困難による内耳障害を生じる可能性があるため、高学年から中学生以降での手術の適応が一般的と考えられている。（深美, 2017）

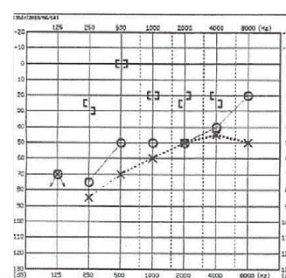


図1 A児の聴力図（H30.6）

4 実践の概要

(1) 実施期間（A児の学年）

平成30年6月（小4）～令和2年7月（小6）

(2) 実践における視点とそのねらい

A児の実態を踏まえ、手術を受けるかどうかを自己決定し、自らの生き方を考えるために、図2の視点で実践に取り組んだ。

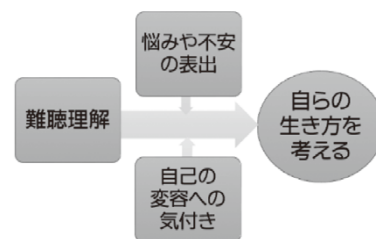


図2 自らの生き方を考えるための視点

① 難聴理解

A児は筆者と初めて会った時に「耳が悪くなる原因は何ですか」「治るんですか」と質問した。そこで、耳の構造や難聴の種類、難聴の原因などを学習し、自己の状態を知ることができるとした。また、原・岩田（2010）は、難聴児が自己の聞こえにくさを認識しにくい環境で過ごしていることにより、自己の曖昧さやアイデンティティ形成の困難が生じ、青年期に深い悩みをもつことを示唆している。このことから、「最近、聞こえにくいのはどんな時？」と毎回必ず聞くようにし、「聞こえにくさ」についての自覚を育みながら、聞こえにくい時の対応方法などをともに考えるようにした。難聴理解が自己理解につながり、これらを深めていくことが自らの生き方を考えることにつながると考えた。

② 悩みや不安の表出

A児は周りに気を遣って、悩みや不安を言わずに我慢することが多かった。難聴通級指導教室で、我慢せず、心の内を吐き出すことで、一人で抱えている苦しみを軽くすることが必要だと考えた。また、悩みがあっても、A児が自分でどうしたいか、どうすると良いかを考え、決めることを大事にした。そうすることで、難聴通級指導教室がない場面でも、困難があった時に自分で考えて行動することができると思ったからだ。しかし、困っていることの解決策を自分で考え出すことは難しかったため、話を聴きながらともに考えるようにした。「一緒に考えてくれる味方がいる」と安心することで、これからどう生きていきたいかをA児自身が考えていくことにつながると考えた。

③ 自己の変容への気づき

A児の考えや行動を意味付けることを大事にした。頑張っていることを認められることで、「分かってくれている人がいる」「自分は自分で良いんだ」と、前向きに自分のことを受け止められるのではないかと考えた。また、過去のワークシート等を振り返り、自己の変容、成長に気付くことが、今後の生き方を前向きに考えることにつながると考えた。

5 実践の子どもの姿と分析・考察

(1) 難聴理解

① 難聴の原因や種類についての学習

耳の構造図を用いて、耳の構造や難聴の種類、難聴の原因などを知る学習に取り組んだ。感音性難聴と伝音性難聴があること、手術で聴力が改善することができるのは伝音性難聴だけで、手術ができることは稀なことなどを説明した。A児は自分が伝音性難聴で、中耳が原因で聞こえにくくなっていることを知り、その日の感想には「手術をしたくてもできない人がいることを知りました」と書いていた。この学習以降、手術に関心をもち始める様子が見られた。

② 自分で聴力検査

自分で聴力検査をすることで、自分の聞こえやすい音、聞こえにくい音などを体感する学習に取り組んだ。「低い音の方が聞こえなかった」「だから男の先生の声はもごもご聞こえるのかな」と、検査の結果から自分の日常生活の聞こえ方を分析する様子が見られた。

③ 「聞こえにくさ」について話すこと

「最近聞こえにくいのはどんな時？」と月に1回から2回の通級指導で毎回話を聴いてきたが、A児は毎回違った聞こえにくさの話をした。「聞こえにくくても友達に聞いたら大丈夫」と話していたが、年齢が上がるにつれて、「友達に聞くのはなんか悪いかなって思って聞かない」「前に行って聞くのは恥ずかしいからそのままにしてる」と聞こえにくい時の対処方法に変化が見られた。人目が気になる思春期のA児の気持ちを受け止め、共感するようにした。

(2) 悩みや不安の表出

悩みや不安を言わずに我慢することが多いA児が気軽に話せる場になるように、A児の思いに寄り添って話を聴くことを大事にしてきた。特に手術に関して、多くの不安や苦しみを抱えていたが、対話を通して気持ちを整理していく様子が見られた。実際の通級時の発話記録からA児の変容を捉えていく。なお、AはA児の発言、Tは筆者の発言である。行動や補足は（ ）で示す。

【表1 手術に関する発話記録①】

通級日	A児（A）と筆者（T）の発話記録
#1 H30.6.27	T：Aさんもしかしたら手術で聞こえやすくなるかもしれないんだって。Aさんは、どう思う？ A：みんなと同じくらい聞こえるようになりたいけど、手術はとっても怖い。（涙ぐみながら答える） A：（しばらく考えて）今はどうしたいか、まだ分からない。 T：そうだよね、怖いよね。手術するかどうか決めるのはAさんだから。ゆっくり考えよう。お母さんや先生はAさんが決められるようにお手伝いするからね。
#2 H30.7.9	（夏休みに総合病院で手術可能かどうかの事前検査を受ける予定） T：D病院に行くのはどうして？ A：E先生（地域の耳鼻科医）の検査の時よりも詳しく耳の中を調べたりするため。 T：詳しく耳の中を調べるのはどうして？ A：普通の人と比べて同じところと、違うところ、悪いところを見るため。 T：見てどうするの？ A：手術をして治るかもしれないし、治るかを調べる。
#3 H30.9.3	T：夏休みにD病院行ってきたと思うけど、検査して何か分かった？ A：私の耳の骨の間に隙間があって、そこにシャーペンの芯くらいの金属を入れる手術をするらしい。 T：へー、すごいね。そんな手術があるんだね。 A：うん。でも半年は飛行機乗れないんだって。でも、するとしても5年生になってからだって言ってたから良かった。

#1では、「手術」と聞くだけで表情が暗くなり、涙ぐみながら話していたが、自分の耳についての学習を進めたり、D病院で事前検査を受け、手術の説明を聞いたりしたことで、手術に対しての心構えができてきた様子が見られた。手術を行うとしても次年度の夏休み以降ということだったため、手術の話の続きは次年度にすることとした。

R1年6月28日に再度、D病院の受診があるため、手術について分からないことや不安に思っていることを医師に自分で聞けるように、質問シートを作ることにした。（以下に示す）

【A児が考えた医師に聞きたい質問シートの記述内容】

「手術をしたら必ず治りますか（補聴器を着けなくても聞こえるか）」「手術は大きい手術ですか、小さい手術ですか（大きい：長時間で複雑、小さい：1～2時間で簡単という意味）」「手術をして何かできなくなることがあったり、体に異常が出たりしますか」「手術の前に準備することはありますか」「片耳だけ手術して困ることはありますか」

【表2 手術に関する発話記録②】

通級日	A児（A）と筆者（T）の発話記録
#4 R1.7.5	T：受診どうだった？聞きたいこと聞けた？ A：うん。成功確率は70%だって。10人の人がいたら7人は治って3人は治らないみたい。補聴器を着けなくても聞こえるくらい治るかは人によって違うって。 A：耳の手術は大体4時間くらいかかるけど、私のは2時間くらいで終わるって。だから小さい方かな。 T：どんな手術なの？ A：かたつむりみたいなのとか、骨のところかは開けてみないと分からないけど、場所によってはばねを入れて、それを震わせて振動で音を伝えるようにするんだって。ダイビングとかかするとそのばねが飛んでしまうからダイビングは一生できなくなる。 T：そっか。Aさんの説明、すごく分かりやすかった。全部聞けて良かったね。今は手術どうしたいと思うの？ A：ドキドキするけど、受けたい…と思う。
R1.7.24	(前回の通級でA児が手術を受けたいと話したため、手術の予約を取り、手術日が9月16日に決まった)
#5 R1.9.13	T：手術の日が決まったね。手術してくれる先生はどんな先生？ A：明るくて元気で優しい先生。 T：へー、それは良かったね。手術の名前はなんていう手術が分かった？ A：アブミ骨手術。アブミ骨っていう骨に穴を開けて人工ピストンを入れるんだって言ってた。顔の神経に近いから、もしかしたら味覚がなくなったり、めまいがしたりするかもしれないって言われた。 T：そうなんだね。すこし不安だね。Aさんの今の気持ちは？ A：少し手術は怖いけど、入院は楽しみだし、頑張る。
R1.9.16	(アブミ骨手術を実施し、成功。聴力は、医師が驚くほどの改善が見られ、左耳は補聴器が不要となった)

#1では恐怖心が強かったが、手術について分からないことなどを整理し、自分で医師に聞いたことで、少しずつ恐怖心が和らいでいく様子が見られた。また、#3、#4で、病院で聞いた説明をA児が自分の言葉で筆者に話すことで、手術についてより理解を深めることができたと考える。手術についての不安が軽減し、見通しをもつことができたことで、自分のために受けてみようとして自己決定することができたと考えられる。また、保護者の判断で手術の時期を決めるのではなく、D病院で最初に手術の話聞いてからゆっくり自分で考える時間が与えられ、自分で受けてみようとして決意してから手術の日が決まったことも、安心して手術を受けることができた一因と考えられる。

術後の10月4日の通級では、「寝返りした時に枕の擦れるガサガサした音とか、食べ物を飲み込む音が聞こえるようになった」「ドアを閉めるボタンっていう音が分厚くなった」と、聞こえるようになった音がたくさんあることを嬉しそうに話した。「手術してどうだった？」と聞くと、「大変だったけど、やって良かった」と笑顔のA児の姿があった。

(3) 自己の変容への気付き

① 「自分の難聴かるた」づくり

自己の変容に気付くことで、自己の成長を感じ、前向きに未来の自分について考えることができると考え、毎年3学期に1年の振り返りとして「難聴かるた」を作る活動を行った。小学4年時は「ロジャーが使えるようになって聞き返すことが減ったし、聞き間違いもなおってきた」と話し、『いまはね、友達の声、聞こえるよ』(図3)というかるたを作成した。新しい補聴器とロジャーを試聴し始めた頃であったため、声が聞こえやすくなり嬉しい気持ちであることが伺える。小学5年時は『ほちょうきはわたしの第2の耳なんだ』(図4)というかるたを作成した。手術後で片耳が聞こえるようになっていたが、「右耳は補聴器が絶対必要だから」と話し、補聴器への愛着心が描かれていた。手術をしても右耳は補聴器のおかげで聞こえることがたくさんあり、助かっていると感じていることが伺える。また、「前の(左耳で使っていた)補聴器は、もう使わないけど宝物にしている」と話し、補聴器がただ不要なものではなく、自分の過去の大切なものになったことが推察できる。2枚を見比べて「来年は右耳の手術も終わってるかもしれないんだよね。どんなの書いてるんだろう」と、未来の自分を想像するA児の姿があった。

② 「今、どう感じている？」

聞こえにくさによる影響を、現在どのように感じているかについて、5段階で自己評価する形式の質問紙を作成した。質問項目は8問で、定期的に行うことで、困り感や聞こえにくさについての意識の変容を追うことができるようにした。自己評価を数値化することで、小学1年生から中学3年生まで取り組めるようにし、記入しながらその数値の理由を説明する児童生徒が多くいた。A児は、数値の変化は少なかったが、心理的な背景の変化が大きく見られた。



図3 A児が小学4年時の難聴かるた



図4 A児が小学5年時の難聴かるた

【表3 A児の4年時と6年時の回答結果】

	質問項目	4年時の回答	6年時の回答
I	友達のように聞こえたらいいなと思う	4：しばしば思う	5：とても思う
II	話している声が聞き取りにくい人がある	3：時々いる	3：時々いる
III	自分の聞こえ方について、親に話すのは平気だ	2：ほぼ平気だ	1：平気だ
IV	ぼく・わたしは、おしゃべり好きだ	5：とても思う	3：時々思う
V	聞こえていなくても、うなずいたり分かったふりをしてしまう時がある	3：時々ある	3：時々ある
VI	聞き取った言葉や話が、後で少し違っていたことがある	5：よくある	3：時々ある
VII	「話を聞いてない」とか「ちゃんと聞きなさい」と言われることがある	5：よくある	1：全然ない
VIII	先生や友達に「もう一回言って」とお願いするのはいやだ	4：しばしば思う	4：しばしば思う

質問Iでは、4年時は4点で「自分の耳がもっと聞こえやすかったらいいのと思うから」と話していたのに対して、6年時は5点に力強く丸をし、「下学年の子に補聴器をじろじろ見られたり、これ何？と聞かれて説明したりするのが嫌だから。補聴器を着けるのが恥ずかしくなってきたから」と答えた。質問VIIからは、新しい補聴器とロジャーを有効に活用できていることが確認できた。質問VIIIでは、4年時も6年時も4点だが、4年時は「先生に聞くのが恥ずかしいから」と答えていたのに対し、6年時は「友達に聞くと、その友達が話を聞けなくなるし、先生に聞くと授業を止めてしまうから申し訳なくて聞きにくい」と答えた。年齢によって、周囲への気持ちや、普段の生活の中での困り感が変化していることが明らかとなった。また、以前の自分の回答と見比べることで「そう思ってたんだ」「今は全然気にならなくなったな」などと自己の成長や変化を振り返る姿が見られた。

③ 「聞こえの道のり」

手術によって両側難聴から一側性難聴になり、6年生になったA児には、補聴器に対する「強い愛着」と「他者から見られる恥ずかしさ」が混在し、複雑な気持ちになっている様子が見られた。加えて、中学生になる前に右耳も手術したいという気持ちが芽生えてきていた。聴力、年齢、周りの環境、様々なことが変わること、嬉しい気持ちや悲しい気持ちを体験してきたA児。もし右耳も手術が成功したらどうなるのだろうか。この先の自己像を形成していくために、「耳が聞こえにくい自分」として生まれた時からここまでの「聞こえの道のり」を自分で振り返る活動を行った。

【表4 「聞こえの道のり」制作中の発話記録】

通級日	A児（A）と筆者（T）の発話記録
#6 R2.6.16	<p>T：これからまた手術を受けたら聞こえ方は変わっていくかもしれないよね。今日は、自分の人生の中でAさんの「聞こえの道のり」はどんなだったかを振り返って作ってみたいと思うんだけど、どうかな。</p> <p>A：おー。生まれた時からの？</p> <p>T：そうそう。いつ補聴器着け始めたかとか覚えてるかなあ？</p> <p>A：補聴器は保育園の時だと思う！</p> <p>T：すごいね、よく覚えてるね。気持ちも思い出せたら書いてみて。良い時があったり、辛い時があったりして、上がったり下がったりしてたかもしれないんだけど…。</p> <p>A：「補聴器着ければ聞こえるのかなあ？」みたいな気持ちだった。入学した時は補聴器のことは全然気にしてなかったと思う。低学年の時はよく補聴器忘れてたなあ…。</p> <p>T：忘れてた？無くて大丈夫だったの？</p> <p>A：ううん。お母さんに届けてもらってた。補聴器が来るまで困ってた。</p> <p>T：そうなんだ。</p> <p>A：4年生の時初めてロジャーをしてみてもドキドキした！前より聞こえるようになったから、気持ちは上がったかな。</p> <p>A：小5の秋に左耳の手術に成功して、補聴器がなくても聞こえるようになったから嬉しかった。けど、冬くらいから補聴器着ける人があんまりなくて、着けてるのが恥ずかしく思えてきた。ここが一番下かな。</p> <p>T：そうか。急に嫌な気持ちきたんだね。</p> <p>A：今は気持ちは真ん中だけど、早く右耳の手術をしてどっちも補聴器なしで聞こえるようになりたいって思う。</p> <p>T：そうなんだね。Aさんの今までの「聞こえの道のり」がよく分かった。上がったり下がったりして、今があるんだね。次回は「この先の自分」について考えてみようかな。</p>
#7 R2.7.7	<p>T：この先Aさんはどんな人になるのだろう。どんなことがあるのだろう。手術を受けるとどう変わっていくのだろう。</p> <p>A：みんなと同じでいられる安心感があると思う。友達との会話が今も楽しいけど、手術が成功したらより楽しくなる。新しい言葉に出会うのも楽しみ。「みんなと同じ両耳聞こえる人」になって自信をもって生きられる気がする。</p> <p>T：そっか。両耳聞こえるようになると、みんなと同じっていう安心感があるんだね。今のAさんはどんな人？</p> <p>A：今は「片耳聞こえる人」になった。前は「両耳補聴器してる人」だった。</p> <p>T：なるほど。「片耳聞こえる人」は良くないの？</p> <p>A：うーん、片耳聞こえるのも良いけど、私は手術でもう片方も聞こえるようになるかもしれないから、それなら治したいって思う。色々あったけど、今は手術を頑張りたいな。</p>

#6では、今までの気持ちを思い出しながら上がったたり下がったりする「聞こえの道のり」を書き上げた。また、#7で書き終えた時、A児はすっきりした表情で「色々あったけど、今は手術を頑張りたい」と話した。この活動を通して、A児は今までの自分を振り返り、今の自分を見つめ、さらにこれからどう生きていきたいかを考えることができた。「手術が成功したらより楽しくなる」「みんなと同じ両耳聞こえる人になって自信をもって生きられる気がする」と自己の生き方を前向きに考えるA児の姿が見られた。

6 成果と課題

実践の結果、A児は悩みながらも自分で手術を受けることを決断し、さらに「もう片方の手術も受けたい」と、これからの自分がどう生きていきたいかを考えることができるようになった。①「難聴理解」の学習で難聴や自分の聞こえにくさについて知り、向き合ったことに加え、②「悩みや不安を表出」しながら、手術のことを自分で知り、手術を受けることを自己決定したことと、③「自己の変容」を振り返ってきたことがそれぞれ作用したことで、A児は自己理解を深め、自らの生き方を考えることができたといえる。手術によって聴力が大きく変わっても、聴力に注目するのではなく、生活のことやその時々気持ちなどを丁寧に聞き取り、共感してきたことで、A児は会話を通して新しい自己像を形成していくことができたのではないだろうか。今後も年齢の変化、聴力の変化、環境の変化等に伴い、A児は新たな自己像をつくり続けていく。

今回の実践から、ただ耳のことを学習したり、聴力の変動を管理したり、アドバイスをしたりする教師のかかわり方ではなく、心理的背景も含め、児童生徒のまるごとを受け止め、「ともに悩み考える存在として児童生徒に寄り添う」教師のかかわり方が重要であったと考える。

また、本事例では、「今どう感じている？」という質問紙において、数値上の変化はあまり見られなかったが、その心理的背景には大きな変化が見られた。これは思春期という発達段階が大きく影響していると考えられる。過去の質問紙と見比べて自己の変容がより分かりやすくなるように、思春期の心の揺らぎに注目し、質問項目を精選しなおすことが今後の課題の1つである。

筆者にとってA児との出会いは、今まで考えたことのなかった「聴力改善」によるアイデンティティの揺らぎがあることを気付かされるものであり、A児とともに「教師としての自己像」が問い直される出来事であった。手術によって聴力が改善される事例はまだ少ないが、学齢期に聴力が改善した場合、どのようにアイデンティティが揺らぎ、どのように確立していくのかという課題は、今後も検討し続けなければならない重要な課題である。

また、今回先行研究を当たっている際、「プレパレーション」という言葉に出会った。田中（2009）によると、プレパレーションとは、治療や検査を受ける子どもに対し、認知発達に応じた方法で病氣、入院、手術、検査その他の処置について説明を行い、子どもや親の対処能力（頑張ろうとする意欲）を引き出すような環境および機会を与えることである。今回の実践において、手術前に筆者が行った取組には、「プレパレーション」と共通する点が複数あった。医療界でもまだ浸透していない言葉のようだが、今回のように手術を受けることが決まった児童生徒に対し、通級指導教室でも取り組むべき内容だと考える。今後も医療技術の発展に伴い、手術により聴力の変わる難聴児は増えることが予測される。手術前後の子どもの心理的ケアを重点的にを行い、医療と教育の連携をより深めていく必要があると考える。

【引用・参考文献】

- 1) 荒木友希子・新井瑠夏「幼児期に人工内耳埋め込み手術を施行した聴覚障害児のアイデンティティ形成について」『心理学の諸領域』Vol. 6 (1), 2017年, 49～59 pp
- 2) 井庭崇・長井雅史『対話のことはーオープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得ー』丸善出版株式会社, 2018年
- 3) 甲斐更紗・鳥越隆士「ろう学校高等部生徒のアイデンティティ発達支援プログラム」『特殊教育学研究』45 (3), 2007年, 161～173 pp
- 4) 田中恭子「プレパレーションの5段階について」『小児保健研究』68 (2), 2009年, 173～176 pp
- 5) 原和大・岩田吉生「小学校の難聴学級における障害認識を目的とした自立活動の授業の一考察」『障害者教育・福祉学研究』第6巻, 2010年, 93～102 pp
- 6) 深美悟「耳科領域－小児中耳疾患に対する手術療法」『小児耳』38 (3), 2017年, 302～307 pp